

いもう 葦毛通信



ホソバリンドウ

2025年12月22日
豊橋市文化財センター
豊橋市松葉町三丁目1
TEL: 0532-56-6060

No. 179

1、擬態と狩り

1) 昆虫の擬態

昆虫の擬態は自分の体を木の葉や幹に似せて捕食者から隠れたり、毒を持った昆虫に似せて捕食されないようにしたものです。これ以外にも鳥の糞に似せて目立たないようにする等様々な擬態のパターンがあります。また、これとは逆に捕食者が自分の体を植物や花に似せて見つからないようにして待ち伏せする場合があります。

今年は葦毛湿原で捕食者が狩りを行った写真が撮れましたので紹介します。

2) ヒメハナグモの擬態と狩り

11月5日にサワヒヨドリの花に蛾（シロツバメエダシヤク）が止まっていたので写真を撮りました。花にぶら下がって動かないので、おかしな止まり方だなと思いましたが、拡大したところ、ヒメハナグモに捕食されているところでした。

ヒメハナグモ（クモ目・カニグモ科・ハナグモ属）は体長5～6mm程の小型のクモで、ハナグモという名前が示すように植物の花で待ち伏せして獲物を狩るクモです。このヒメハナグモはサワヒヨドリの花で待ち伏せしていました。体色はわずかにピンク色が入った白色でサワヒヨドリの花の色に似せて擬態しているようです。捕獲したシロツバメエダシヤクに噛みついて毒を注入して動けないようにして体内を溶かし、それを吸い取って養分に行っているようです。シロツバメエダシヤクは翅を広げた長さが4～5cm程度ですが、こんなに大きな獲物を小さなクモ1匹で食べつくせるのか疑問に思ってしまう。草むらに隠れて何日もかけて消化するのかもしれない。



シロツバメエダシヤクを捕食するヒメハナグモ（2025年11月5日）

3) カマキリの擬態と狩り

6月22日にはヒメヒカゲがカマキリに捕食されていました。カマキリは翅がまだ無く幼体のようです。オオカマキリかチョウセンカマキリの可能性があります、種名は分かりません。ヌマガヤの葉の上でヒメヒカゲを捕らえていました。カマキリの幼体は翅が無く飛べないので待ち伏せで狩りをしますが、細長い体形や緑色の体色がヌマガヤの葉に似ており擬態しているようです。

捕まったヒメヒカゲはメスで、捕まったメスの周りをしばらくの間オスが飛び回っていました。下左写真は捕まったメスの下で、オスがイソノキの葉にとまっているところです。交尾中にカマキリに襲われたのかもしれませんが、名残惜しそうにしていたのですが、しばらくして飛び去って行きました。下右の写真はカマキリがヒメヒカゲを食べているところですが、ヒメヒカゲはすでに頭部が食べられて無くなっていました。

愛知県絶滅危惧ⅠA類で、愛知県希少野生動植物種にも指定されているヒメヒカゲですが、これも自然の摂理といえるでしょう。以前、ヒメヒカゲがクモの巣に捕まっていたので助けたことがあります、今回はすでに頭部が食べられていたので、そのままにしました。

本来は、「**食べる:食べられる**」という自然の営みに対して人間が手を加えることは良くないのかもしれませんが、ヒメヒカゲは葦毛湿原では絶滅寸前になっており、なんとかこの状況を脱して絶滅を回避したいと思っています。



ヒメヒカゲ（メス）を捕食するカマキリ（2025年6月22日）
上右側写真のヒメヒカゲのメスは頭部を食べられている。

2、ホソバリンドウとウメバチソウの人工授粉

葦毛湿原では数が少なくなったホソバリンドウとウメバチソウについて、人工授粉を行って来ました。しかし、近年、特にこの2種は開花数を減らしてきました。ウメバチソウは2024年には開花がゼロでしたが、2025年は1株が新たな場所で出現し1輪の花をつけました。

1) ホソバリンドウ

ホソバリンドウは2021年には17株でしたが、2022年には7株に、2023年は6株に減少しました。2024年は9株でしたが、2025年は19株に増えました。2024年の夏にはN地点で15株の発芽を確認しましたが、イヌノハナヒゲに負けて開花したのは4株だけでした。今年はホソバリンドウ周辺のイヌノハナヒゲを刈り取ったところ、15株が残り、10株が開花しました。

人工授粉も2021年は8回、2022年は4回、2023年は3回、2024年は10回でしたが、2025年は18回

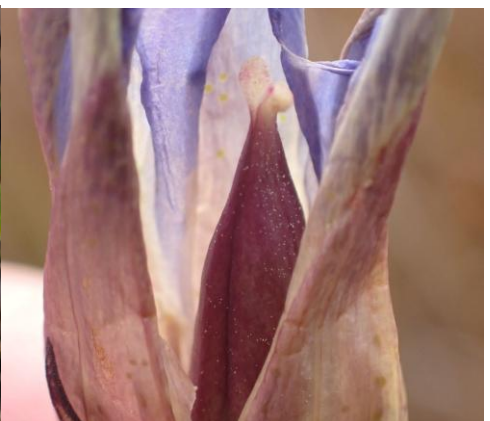
行いました。ホソバリンドウは雄蕊が雌蕊より先に熟す雄性先熟で、右の4枚の写真は各段階の写真です。上左から雄蕊が閉じている開花初期段階で、花弁にとまっているのはポリネーターのホソヒラタアブです。右は雄蕊が開きかけている状態、下左は雄蕊が完全に開いて雌蕊が伸びている段階、下右は受粉が成功し、雌蕊の下の子房が黒くなって膨らんでいる状態です。ホソバリンドウは



開花状況 (2025年11月4日)



(11月22日：雄蕊が閉じている) (11月20日：雄蕊が少し開く)



(11月21日：雌蕊が伸びた) (11月27日：子房が膨らむ)

開花が終わっても花弁は落ちず、子房を包み込むように閉じていきます。これから種子の成熟段階を確認し、最後に種子散布が順調に行われているのかを確認します。

昨年、三太郎池湿地のミコシギクの観察では、自然状態での種子散布ができていないことを確認し種子を採取して人工的な発芽実験と種子散布を行いました。葦毛湿原のホソバリンドウも個体数が増えないのは、種子散布ができていない可能性も考えられます。

2) ウメバチソウ

ウメバチソウも葦毛湿原指定地内では2021年は4花だったものが、2022年には2花に減って、2023年はとうとう開花がゼロになってしまい、2024年も開花は見られませんでした。しかし、2025年はO地点で1輪が開花しました。

昨年は三の沢の国有林内で1輪だけ開花しましたが、結実せず種子はできませんでした。ウメバチソウもホソバリンドウのように自家受粉はしないようです。

今年は葦毛湿原指定地内、国有林内、第2湿地の3か所でウメバチソウが開花しましたが、いずれも1輪だけで合計3輪だけでした。ウメバチソウは葦毛湿原とその周辺では絶滅寸前の状態です。

今年のウメバチソウの人工授粉は3か所のウメバチソウの花粉を相互に受粉させ、11月5日から11月17日までの間に4回の人工授粉を行いました。人工授粉後を観察すると雌蕊の下の子房が膨らみ、受粉は成功したようです。今後、種子が順調にできるのか、種子散布はうまくいくのかを確認します。

絶滅寸前の植物を保護していくためには、開花だけではなく、受粉ができているか、種子散布が行われているかという、現状を確認して対処していく必要があると思います。



ウメバチソウ結実状況（2025年12月1日）



ウメバチソウ開花状況（2025年11月4日）



結実状況（2025年12月1日）